一本のわら

楠山正雄

一

むかし、大和国に貧乏な若者がありました。一人ぼっちで、ふた親も妻も子供もない上に、使ってくれる主人もまだありませんでした。若者はだんだん心細くなったものですから、これは観音さまにお願いをする外はないと思って、長谷寺という大きなお寺のお堂におこもりをしました。

「こうしておりましては、このままあなたのお前でかつえ死にに死んでしまうかも知れません。あなたのお力でどうにかなるものでしたら、どうぞ夢ででもお

教え下さいまし。その夢を見ないうちは、死ぬまでここにこうしておこもりをしておりますから。」

こういって、その男は観音さまの前につっ伏しました。それなり幾日たっても動こうとはしませんでした。

するとお寺の坊さんがそれを見て、

「あの若者は毎日つっ伏したきり、物も食べずにいる様子だが、あのまま置いてかつえ死にに死なれでもしたら、お寺の汚れになる。」

とぶつぶつ口小言をいいながら、そばへ寄って来て、

「お前はだれに使われている者だ。いったいどこで物を食べるのか。」

と聞きました。若者はとろんとした目を少しあけて、

「どうしまして、わたしのような運の悪い者は使ってくれる人もありません。ごらんのとおり、もう幾日も何も食べません。せめて観音さまにおすがり申して、生きるとも死ぬとも、この体をどうにでもして頂こうと思うのです。」

といいました。坊さんたちはそこで相談して、

「困ったものだな。うっちゃっておくわけにもいかない。仮にも観音さまにお願い申しているというのだから、せめて食べ物だけはやることにしよう。」

といって、みんなで代わる代わる、食べ物を持って

行ってやりました。若者はそれをもらって食べながら、とうとう三七二十一日の間、同じ所につっ伏したまま、一生懸命お祈りをしていました。

いよいよ二十一日のおこもりをすませた明け方に、若者はうとうとしながら、夢を見ました。それは観音さまのまつられているお帳の中から、一人のおじいさんが出てきて、

「お前がこの世で運の悪いのは、みんな前の世で悪いことをしたむくいなのだ。それを思わないで、観音さまにぐちをいうのは間違っている。けれども観音さまはかわいそうにおぼしめして、少しのことならしてや

ろうとおっしゃるのだ。それでとにかく早くここを出ていくがいい。ここを出たら、いちばん先に手にさわったものを拾って、それはどんなにつまらないものでもだいじに持っているのだ。そうすると今に運が開けてくる。さあそれでは早く出ていくがいい。」
と追い立てるようにいわれたと思うと、ふと目を覚ましました。

若者はのそのそ起き上がって、いつものとおり坊さんの所へ行って、食べ物をもらって食べると、すぐにお寺を出ていきました。

するとお寺の大門をまたぐひょうしに、若者はひょ

いとけつまずいて、前へのめりました。そしてころんだはずみに、見ると、路の上に落ちていた一本のわらを、思わず手につかんでいました。

若者は、

「何だわらか。」

といって、つい捨てようとしましたが、さっきの夢に、「手にさわったものは何でもだいじに持っておれ。」といわれたことを思い出して、これも観音さまのおさずけものかも知れないと思って、手の中でおもちゃにしながら持っていきました。

二

しばらく行くと、どこからかあぶが一匹（ぴき）飛（と）んできて、ぶんぶんうるさく顔（かお）のまわりを飛（と）び回（まわ）りました。若者（わかもの）はそばにある木の枝（えだ）を折（お）って、はらいのけはらいのけして歩（ある）いていましたが、あぶはやはりどこまでもぶんぶん、ぶんぶん、うるさくつきまとってきました。

若者（わかもの）はがまんができなくなって、とうとうあぶをつかまえて、さっきのわらでおなかをしばって、木の枝（えだ）の先（さき）へくくりつけて持（も）っていきました。あぶはもう逃（に）げることができなくなって、羽（はね）ばかりあいかわらずぶん

ぶんやっていました。

すると向こうから、身分のあるらしい様子をした女の人が、牛車に乗って長谷寺へおまいりにやって来ました。

その車には小さな男の子が乗っていました。男の子は車のみすを肩にかついで、たいくつそうにきょろきょろ外のけしきをながめていました。すると若者が木の枝の先にぶんぶんいうものをつけて持って来るのを見て、ほしくなりました。そこで男の子は、

「あれをおくれよ。あれをおくれよ。」

と、馬に乗ってお供についている侍にいいました。

侍は若者に向かって、

「若さまがそのぶんぶんいうものをほしいとおっしゃるから、気の毒だがさし上げてくれないか。」

と頼みました。若者は、

「これはせっかく仏さまからいただいたものですが、そんなにほしいとおっしゃるなら、お上げ申しましょう。」

といって、すなおにあぶのついた枝を渡しました。

車の中の女の人はそれを見て、

「まあ、それはお気の毒ですね。ではその代わりに、これを上げましょう。のどがかわいたでしょう、お上

がりといって、上げておくれ。」
といって、大きな、いいにおいのするみかんを三つ、りっぱな紙にのせて、お供の侍に渡しました。

若者はそれをもらって、

「おやおや、一本のわらが大きなみかん三つになった。」

とよろこびながら、それを木の枝にむすびつけて、肩にかついでいきました。

三

するとまた向こうから一つ、女車が来ました。こんどは前のよりもいっそう身分の高い人が、おしのびでおまいりに来たものとみえて、大ぜいの侍や、召使の女などがお供についていました。するとそのお供の女の一人が、すっかり歩きくたびれて、

「もう一足も歩けません。ああ、のどがかわく。水が飲みたい。」

といいながら、真っ青な顔をして往来に倒れかかりました。侍たちはびっくりして、どこかに水はないかとあわてて探し回りましたが、そこらには井戸もなし、流れもありませんでした。そこへ若者がのその

通りかかりますと、みんなは、

「もし、もし、お前さん、この近所に水の出る所を知りませんか。」

とたずねました。若者は、

「そうですね。まあこの辺、五町のうちには清水のわいている所はないでしょうが、いったいどうなさったのです。」

と聞きました。

「ほら、あのとおり歩きくたびれて、暑さに当たって、水をほしがって死にそうになっている人があるのです。」

「おやおや、それはお気の毒ですね。ではさしあたりこれでも召し上がってはいかがでしょう。」

若者はそういって、みかんを三つとも出してやりました。みんなは大そうよろこんで、さっそくみかんをむいて、病人の女にその汁を吸わせました。すると女はやっと元気がついて、

「まあ、わたしはどうしたというのでしょう。」

といいながら、そこらを見回しました。みんなは水がなくって困っていたところへ、往来の男がみかんをくれたので助かったことを話しますと、女はよろこんで、

「もしこの人がいなかったら、わたしはこの野原の上で死んでしまうところでしたね。」

といって、真っ白な上等な布を三反出して、

「どんなお礼でもして上げたいところだけれど、途中でどうすることもできないから、ほんのおしるしにさし上げます。」

といって、渡しました。

若者はそれをもらって、

「おやおや、みかん三つが布三反になった。」

と、ほくほくしながら布を小わきにかかえて、また歩いて行きました。

四

その明くる日、若者はまた昨日のようにあてもなく歩いて行きました。するとお昼近くなって、向こうから大そうりっぱないい馬に乗った人が、二、三人のお供を連れて、とくいらしくぽかぽかやって来ました。

若者はその馬を見ると、

「やあ、いい馬だなあ、ああいうのが千両馬というのだろう。」

と、思わず独り言をいいながら、馬をながめていま

した。すると馬は若者の前まで来て、ふいにばったり倒れて、そのままそこで死んでしまいました。乗っている主人もお供の家来たちも、真っ青になりました。馬のくらをはずして、水を飲ましたり、なですったり、いろいろにいたわっていましたが、馬はどうしても生き返りませんでした。乗り手はがっかりして、泣き出しそうな顔をしながら、近所の百姓馬を借りて、それに乗ってしおしおと帰っていきました。その後から、家来たちが、馬のくらやくつわをはずして、ついていきました。けれどいくらいい馬でも、死んだ馬をかついでいくことはできないので、それには下男を

一人後に残して、死んだ馬の始末をさせることになりました。さっきからこの様子を見ていた若者は、「昨日は一本のわらがみかん三つになり、三つのみかんが布三反になった。こんどは三反の布が馬一匹になるかも知れない。」と思いながら、下男のそばに近づいて、

「もし、もし、その馬はどうしたのです。大そうりっぱな、いい馬ではありませんか。」

といいました。下男は、

「ええ、これは大金を出して、はるばる陸奥国から取り寄せた馬で、これまでもいろんな人がほしがって、いくらでも金は出すから、ゆずってくれないかと、ず

いぶんうるさく申し込んできたものですが、殿さまが惜しがって、手放そうともなさらなかったのです。それがひょんなことで死んでしまって、元も子もありません。まあ、皮でもはいで、わたしがもらって、売ろうかと思うのですが、旅の途中ではそれもできないし、そうかといってこのまま往来に捨てておくこともできないので、どうしたものか、困っているところです。」

といいました。若者は、

「それはお気の毒ですね。では馬はわたしが引き受けて、何とか始末して上げますから、わたしにゆずって下さいませんか。その代わりにこれを上げましょう。」

といって、白い布を一反出しました。下男は死んだ馬が布一反になれば、とんだもうけものだと思って、さっそく馬と取りかえっこをしました。その上、「もしか若者の気がかわって、馬の死骸なんぞと取りかえては損だと考えて、布を取り返しにでも来ると大へんだ。」と思って、後をも見返らずに、さっさと駆けて行ってしまいました。

五

若者は、下男の姿が遠くに見えなくなるまで見送

りました。それからそこの清水で手を洗いきよめて、長谷寺の観音さまの方に向いて手を合わせながら、

「どうぞこの馬をもとのとおりに生かして下さいまし。」

と、目をつぶって一生懸命にお祈りをしました。

そうすると死んでいた馬がふと目をあいて、やがてむくむく起き上がろうとしました。若者は大そうよろこんで、さっそく馬の体に手をかけて起こしてやりました。それから水を飲ませたり、食べ物をやったりするうちに、すっかり元気がついて、しゃんしゃん歩き出しました。

若者(わかもの)は、近所(きんじょ)で布(ぬの)一反(たん)の代(か)わりに、手綱(たづな)とくつわを買(か)って馬(うま)につけますと、さっそくそれに乗(の)って、またずんずん歩(ある)いて行きました。

その晩(ばん)は宇治(うじ)の近(ちか)くで日が暮(く)れました。若者(わかもの)はゆうべのようにまた布(ぬの)一反(たん)を出(だ)して、一軒(けん)の家(いえ)に泊(と)めてもらいました。

その明(あ)くる朝早(あさはや)くから、若者(わかもの)はまた馬(うま)に乗(の)って、ぽかぽか出(で)かけました。もう間(ま)もなく京都(きょうと)の町(まち)に近(ちか)い鳥羽(とば)という所(ところ)まで来(き)かかりますと、一軒(けん)の家(いえ)で、どこかうち中(じゅう)よそへ旅(たび)にでも立(た)つ様子(ようす)で、がやがやさわいでおりました。若者(わかもの)はふと考(かんが)えました。

「この馬をうかうか京都まで引っ張って行って、もし知っている者にでも逢って、盗んで来たなぞと疑われでもしたら、とんだ迷惑な目にあわなければならない。ちょうどこのうちの人たちはよそへ行くところらしいから、きっと馬が入り用だろう。ここらで売って行く方が安心だ。」

こう思って、若者は、

「もしもし、安くしておきますから、この馬を買って下さいませんか。」

といいました。するとそこのうちの人たちは、なるほどそれは有り難いが、安く売るといってもさしあた

りお金がない。その代わり田とお米を分けて上げるから、それと取りかえっこなら、馬をもらってもいいといいました。若者は、

「わたしは旅の者ですから、田やお米をもらっても困りますが、せっかくおっしゃることですから、取りかえっこをしましょう。」

とふしょうぶしょうにいいました。

「そうですか。では馬をはいけんしよう。どれどれ。」

と向こうの男はいいながら、馬に乗ってみて、

「どうもこれはすばらしい馬だ。取りかえっこをしてもけっして惜しくはない。」

といって、近くにある稲田を三町と、お米を少しくれました。そして、

「ついでにこの家もお前さんにあずけるから、遠慮なく住まって下さい。わたしたちは当分遠方へ行って暮らさなければなりません。まあ、寿命があって、また帰って来ることがあったら、そのとき返してもらえばいい。また向こうで亡くなってしまったら、そのまま、この家をお前さんのものにして下さい。べつに子供もないことだから、後でぐずぐずいうものはだれもないのです。」

といって、家まであずけて立って行きました。

若者はとんだ拾い物をしたと思って、いわれるままにその家に住みました。たった一人の暮らしですから、当分はもらったお米で、不自由なく暮らしていきました。

そのうちに人を使って田を作らせて、三町の田の半分を自分の食料に、あとの半分を人に貸して、だんだんこの土地に落ち着くようになりました。

秋になって刈り入れをするころになると、人に貸した方の田はあたり前の出来でしたが、自分の分に作った方の田は大そうよくみのりました。それからというものは、風でちりを吹きためるように、どんどんお金

がたまって、とうとう大金持ちになりました。家をあずけて行った人も、そのまま幾年たっても帰って来ませんでしたから、家もとうとう自分のものになりました。

そのうちに、若者はいいお嫁さんをもらって、子供や孫がたくさん出来ました。そしてにぎやかなおもしろい一生をおくるようになりました。

一本のわらが、とうとう、これだけの福運をかき寄せてくれたのです。

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社
　１９８３（昭和58）年６月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：林　幸雄
２００６年７月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。